

時分の花

安東次男

勝負ことは嫌いではないが、いつとはなしに争うことに気乗がしなくなった。その気乗のしないままにことに臨めば、必ず負ける。麻雀はもとより囲碁将棋のような手筋の立つものでも、なんとなく負けてしまう。

とくに文学好きでもなかった少年が、長じて文事に手を染めるようになったのは、血の気の多さを自ら矯めるつもりもいくぶんあったらしいから、負けるのはよくすりになるが、といって負ければ口惜しさはどつしよつもない。とどのつまりは手の施しよつのない自己嫌悪に陥ることになって、これは腑抜も同然だから、ろくな文章も書けない。

勝負師の緊張感だけはあって、じつさいには勝負にならない世界がどこぞにないものか、そんなものがあつたら生きることがさぞ楽しいだろう、と日ごろ考えていたらそれがあつた。連句である。じつは、芭蕉のことをあれこれ考えているうちにふと気がついた。

ものはためし、相手の一人も探してやるつと心に留めていたところ、世の中には物ずきな人間もいるものだ。一人ならず三人までも、是非やりたいというのが現れた。もっとも、そのうちの一人川口澄子さんはいそが乗気だったが、あとの二人つまり丸谷才一と大岡信は

最初かなり尻込したらしい。かれらに働きかけた川口さんが、そう告げた。理由は、いびられるというたわいもない妄想だが、連句というものはそういうものではない、それどころか亭主が客をもてなす深甚なる心が基本になればならないのだ、と私が説いてきかせたらようやくかれらも納得し、いくぶん安堵したらしい。三人が、もてなすのにもくたびれかけた私をそそのかして、またやるうと積極的な熱意を示しはじめたのは、初回からいくぶん時が経ってからだつたと覚えている。

記念すべき歌仙は昭和四十五年庚戌、仲秋の一日、

蝸といふ名の裏山をいつも持つ 流火

やしろに隣る碑のつゆ 才一

月かげの濃きあたりより村に入り 信

と始つた。客発句、亭主脇というのは俳譜の約束であるから、亭主が発句というのはおかし

いが、そこは出だしが一応さまになっていなければあとの運びようもない。かれらは口実をかまえてしきりに遠慮したがるのである。とりあえず私の旧作を以て、当季当座の挨拶に替えることにした。稽古とあればそれもやむをえない。脇上手の芭蕉もこと志に反して発句をつとめさせられる破目になることが多かった。じつは芭蕉の思惑は別にあつたらしく、弟子たちが師に発句を譲るつもりならこちらら客のつもりでいればよい、という引違えの心理の解放感がそこに生れたのだ、と思う。じつさいには亭主であるものが客にもなれる、という遊はなかなか面白いものだ。これは幼児のままごと遊に似てそれより多少複雑な工夫がいる、とそのとき気がついた。勝負の決着をつけなくてよい、ということはずこの段階で閃く。人に家を買わせてわれは年忘、と独り言をつぶやいた俳譜師の心が見えた。

この歌仙は三回ばかりに分けて翌四十六年五月、三十六句満尾に漕ぎつけたと記憶する。その後、小説家と詩人だけが相手では飽きころも兆すと考えて、専門の俳句づくりも相手にして、かれこれ十度もこころみたか。

鸞の一ト啼にとぶ細雨かな 実

描かんとすれば墨の濃き春 流火

崖たててかすみを流す松の貌 寒太

また、

陽炎のかたまりかけてこんなもの 虚子

十里四方にあんず咲くとき 才一

白酒に持ちおもりする荷を解いて 信

陰干にする土師はじの大甕 流火

名月を朝から騒ぐ京をんな 才一

豆腐の桶に鈴蟲を飼ふ 実

というようなものを作った。いずれも要した時間のわりには遅々として先へ運ばない。飴山  
実と石寒太は俳人。虚子のことは言つまでもない。故人の句を借りての脇起しの興行は、昔  
にも例がある。

なかでは、わが青春のころ句作りの懐しい師であり、いまだに気の置けぬ交りの続いてい  
を加藤楸邨さんとの往復書面による両吟が、比較的長く続いている方で、これはいまもって  
終わっていない。

そもそものはじめは紺の緋哉

流火

けはひはあれどいまだ笹鳴

達谷

くもり日の菜をいろいろに漬けてみて

流火

またも顔出す母のひと言

達谷

忘れぬし月はしばらく軒を駈け

達谷

わりなき旗に踊借らるる

流火

せかせかと二百十日を逃げあるき 流火

ゆるみて脆き落人の畦 達谷

美濃の國青墓村はめかりどき 達谷

ふたごをねだる春雷のひま 流火

めざめたる暮つかの間の戀呼んで 達谷

吉野をいづる道に迷ひし 流火

ものの音杉をはなるる暁の月 達谷

夜なべついでに作る曲物 流火

そこで楸邨大人沈思してやや久しい。これはいずれ三十六句巻き挙げるつもりでいる。

どうも尻切ばかりがたまってこまる。それというのも、初折の六句ぐらいまでなら、誰にでもどうにかこうにか継げるのである。そのあとになると使うことばがやたら不自由になる。似たような発想が又しては顔を出す。そこでつい付句も渋り、酒ばかりがはかどるといっ

とになるらしいが、昔の人の連句もその点では巻尾なお振るっているといふのは少い。楸邨さんとの両吟は、その奉職する大学に数年間つき合った私が、大人の停年をよいしおにこちらも辞したとき、亭主が感謝の意をこめて旧作拙句に挨拶の脇を付けて寄せされたのにはじまる。停年にはなつたがこれから初一念を貰くつもりだからよろしく、と言っているのだ。それはよいが、わざわざ無季の句を拵んで季（笹鳴は冬の季題）の脇起しをやるとは、人がわるい。うっかりとはまるところだった。「如月の菜をいろいろに漬けてみて」と付けかけて、主客は同季という約束がある以上、これは具合がわるいと気がついた。如月は既に春である。発句が無季でそれに付けた脇が冬なら、第三の句はやはり冬としなければ、主客の挨拶になるまい。知るかぎりこういう破格な連句の例はあるまいと思うが、「如月の」を「くもり日の」と改めて（漬菜は冬の季）、いま一工夫をさせてもらったことにこちらの興が大いに動いた。続けてみる気になったのである。

二つの句案はどちらがよいとも一概には言えないが、「如月の」と作りたかつた心残りは私にあり、そこのところを汲みとってくれるのは相手の方だ、と心を整理するまでにはそれ

が事実上ごく短時間のことであっても、心理的にはずいぶん長い時間だったように思う。楸邨さんは私が手紙で伝えてやった心残りを「またも顔出す母のひと言」と、再便で汲んでよこした。連句は、発句であると付句であるとかかわらず、独りで喋ってしまつては、次の人の言うべきことばがなくなる、いつてみれば余情の汲出し様を最も重んじる文学である。作つた方の側からいえば、そこに働く自己抑制にうまみが生じるものだろう。こついつことも、実際に自分で手を染めてみなければわからない。

こと一句立の句作りに関しては練達の士であるはずの楸邨大人も、その辺の事情はあとをばこんでいるうちに思い知らされたらしく、ぼくの句は、きみが寄添おうとしているのに、振切つていつの間にか独りごとになつてしまふなあ、これは長年俳句ばかり作り続けてきたむくいだ、としみじみと洩らしていた。

ともあれ、自分を縛ることによつて相手を縛り、そこから一挙に己を解き放つ工夫というのは、たいへん健康によい。現代のひ弱で鬱屈した状況のなかで、充実した瞬間を味おうと思えば、これにまさる遊は容易に他には見当らない。「文台引下せば則反古」と言捨てた手

だれ俳諧師のことばが、よく納得ゆく。芭蕉もそうだったが、未練の多い人間ほどこれは良いくすりになる。格別の場所もとらず、遊ぶべき道具もいらず、むろん武器など無縁であるから、うまく使えば無刀取の極意のようなものだ。ことをそろばんにたとえれば、日常の不確かなことばを以てこれほど貸借の感情にさっぱりとけりをつけてくれるものも、ほかにない。

とはいうものの、錆びついたことばは、なかなか思うようには働いてくれない。実地にやってみれば、そこもよくわかる。面白いからというよりも、このじれったさが、又しても連句に駐立てるのかもしれない。物書きとしてはまことに屈辱的なことだ。何しろ即席のことだから、手の内はさらされているし、丸谷や大岡が最初ためらったのもその辺の恰好のわるさをいくぶん気にしたからだろう。ところが、そうでない気丈な仁もいて、夷齋こと石川淳さんは、吾々の遊を小耳にはさんでたいそう興味を持たれたらしい。自ら席を設けて、礼儀正しく招待してくださった。丸谷、大岡それに私だが、丸谷は夷齋の第子筋に当る。四十八年癸丑の年もそろそろ秋風の立つ日だったかと思う。三人は、夷齋先生にむしる客として存

分に遊んでもらうことにきめた。

鳴る音にまづ心澄む新酒かな

夷齋

木戸のきしりを馳走する秋

流火

月よしと訛うれしき村に入り

信

どこの縁にも柳散る朝

才一

と始めて、これはたしか三回ほどでその年の末に満尾にした。ことばの幻術できこえた当世小太刀の名手を遊ばせるつもりでこちらはいたのだが、いざ始めてみると一番熱心なのは夷齋先生で、思のほかすんなりと巻きあがった。はこび様の早さに呆れたぐらいである。何回かかっても終までやりましよう、やらなければ連句は意味がありません。きつぱりと初回にそう言った客人の顔を見ながら、丸谷と大岡はかなり複雑かつうるたえた表情を示した。それにもまして内心こまったのは私である。毎句二人に助け舟を出し、ときには諄々と理を説

いてきかせ、大ナタをふるつことさえあるのも苦勞なところへもつてきて、立入って手を触れるわけにもゆかぬ客人が加つたとなると、まったく身の細る気がする。当の夷齋は、ときに宗匠の註文におとなしく耳を傾け、ときには異議を唱え、そして自らのことばにはつまずいたりもしながら、全体としてはかなり独創的に、莊周のごとく栩栩然と遊んだ。

三日替へざる風呂をまた焚く

信

都路は塵もめぐみの花の陰

夷齋

初案は「塵もうれしき」だった。「うれしき」は既に第三の句で使われていると私が注意すると、先生は一思案のあと「めぐみの」と直す。そこで、「私のいままで書きましたものの中に、めぐみという言葉を自発的に使った例はおそらくないと思います。めぐみという観念は元来わたくしにない。私の店では扱っておりません」と言ったものだ。答えて私が、「使いたくない言葉を使わせることも連句です」と言う。そして先生は、付合の他者

的発想なるものを了承されたようである。まんざら心残りのふうでもなかった。その証拠に、つい先立つても夷齋発案による小集をいま一席設けられた。この会、じつは私が着にされるある事情があったために、発句は私なりに工夫をして持参した。

木守に来てゐる修羅の夜明かな

つはぶきのまがねたたかむ初時雨

いずれをかというわけである。句は一つともある日ある時の庭前の感興であり、そこにおのずと自画自詠の気味も現れていたと思うが、裏には残り乏しい木守柿を喰荒す早朝のヒヨドリも、ツワブキの針金のような瘦身をたたく初時雨も、あなたがた連衆の姿とお受取になつてよい、という諧謔もむろんこめた。他人にはわからぬ捌の苦勞をいつも味つていと、あくまでも客としてどうぞ御随意にと発句を差出して、つまり「人に家を買はせて」いる夏炉冬扇ぶりは、じつにいい気持のものだ。俳譜の滑稽の妙味は、自らこういう主客の心

を合せ味つたときにはじめてわかる。その日の連句は、

木守に来てゐる修羅の夜明けかな 流火

夢吹きぬける嵯峨のこがらし 夷齋

あきなひの裏のことはも知りそめて 信

竿の撓ひをためす夕ぐれ 才一

逃げた魚惜まぬふりに月を待つ 夷齋

浅瀆に凝るわかき門跡 流火

と、初折の表六句をはこんだところで、(木守は晩秋の季語だが、敢て初冬の用とした)例によつて次回へもちこすことになった。これがあとあとどういふふうに通ばれて終るものやら、誰にも見当がつかぬ。それも連句のたのしみだろう。もともと個性も好みも違つた人間が集つて、考えてみれば言葉などというまことにあやふやな記号をたよりに、共通の解釈を

さぐりたしかめる遊である。物の高低明暗や呼吸の緩急のごときは、自然の理である。気張ったしゃれた句ばかり並べても連句にはなるまい。そういう独り合点を締出してしまつ無言の圧力が、この遊にはある。はこびによつては凡にしか作りえない句が、最も精彩のある付句を次に引出すこともあるのだ。そういう一座建立のうまみがわかるまでには、まだまだ二苦勞も三苦勞もしてみなければなるまいかと思う。